

# 母親の心理・行動と新生児の行動特徴

## 一妊娠時の母親の神経症的傾向と児の新生児期行動特徴一

兼子 和彦 (葛飾赤十字産院産婦人科)

大野 マチ子, 馬場 テツ (葛飾赤十字産院産婦人科)

水上 啓子 (国立小児病院小児医療研究センター小児生態研究部)

### 研究目的

出生時の新生児にみられる行動上の個体差は著しいものがあるが、今回この個体差に関わる要因として、妊娠中の母親の精神状態(神経症的傾向)をとりあげ、児の新生児期における行動特徴との関係につき検討を試みた。

### 研究対象および方法

対象は妊娠初期より葛飾赤十字産院で受診し、妊娠経過にとくに異常を認めなかった年齢35歳以下の初産婦77例とその児を選んだ。児は出生時 Apgar score 8点以上の正期産 AFDで、帝王切開、骨盤位分娩、骨盤形態異常による分娩異常、多胎などは除外した。

調査方法は妊娠第8月に母親学級において Cornell Medical Index (CMI) を妊婦に実施し、CIJ の身体的自覚症に関する区分の30項目と MNOPQR の精神的自覚症に関する区分の51項目とによる神経症判別図を用い、その神経的傾向につき評価した。対象母体の児については出生3から7日の間に Brazelton Neonatal Behavioral Assessment Scale(ブラゼルトンスケール)を実施し、行動特徴を評価した。

CMI 評価で得た母親の神経症的傾向の分類に従って児を区分した。すなわち CMI I と評価された母親の児を「正常群」、CMI II の母親の児を「ほぼ正常群」、CMI III の母親の児を「神経症的傾向群」とした。なお今回の調査では CMI IV (神経症群) に該当するものは認めなかった。

以上3群の児に示されたブラゼルトンスケール27尺度の評価につき各々の度数分布を調べ、 $\chi^2$  検定を用い、3群間の差異につき検討した。

### 研究結果と結語

対象児77例は正常群41例、ほぼ正常群26例、神経症的傾向群10例に分類された。

正常群とほぼ正常群とではブラゼルトンスケールの尺度についても有意差を認めず、正常群と神経症的傾向群とでは4尺度に、ほぼ正常群と神経症的傾向群とでは同一尺度のうちの3尺度に有意差を認めた。

すなわち、尺度8(生命的聴覚刺激に対する反応)では、正常群では54%がカテゴリ-4(声がすると鎮まり、目を輝かす)およびカテゴリ-5(その声のする方向へ眼を動かす)に該当するが、神経症的傾向群では僅か10%にとどまり、その反応はカテゴリ-3や2のような呼吸の変化やまばたき、身体を鎮める程度にとどまることが認められた(図1)。

尺度10(敏活さ)の外界に敏感に反応する能力は、正常群、ほぼ正常群ではカテゴリ-4、5の中等度のところに過半数の分布がみられたが、神経症的傾向群では4、5の分布はなく、カテゴリ-6、7に70%の分布が認められ、正常群やほぼ正常群に比し外界に敏感に反応する状態を多く有することが推測された(図2)。

尺度14(抱かれやすさ)では、正常群で71%が、ほぼ正常群で69%がカテゴリ-4から6の抱くと腕の中におさまる反応を示すが、神経症的傾向群では60%がカテゴリ-2の抱かれることに抵抗を示すものおよびカテゴリ-3の抱かれても無反応に分布した(図3)。

尺度26(手を口にもっていく能力)すなわち児が自らを鎮静化する能力ともみなされるものでは、神経症的傾向群では手を口にもっていく能力は低く、カテゴリ-1および2に80%が分布した。一方、正常群ではこれに該当するものは25%、ほぼ正常群でも36%にと

どまり、神経症的傾向群では自己鎮静能力も弱いことが推定された。(図4)。

以上、ブラゼルトンスケールの27尺度のうち4尺度ではあるが、神経症的傾向の母親の児に「人の声に対する反応」「敏活さ」「抱かれやすさ」「自己鎮静」など

人間関係に大きく関る尺度において、心身面で正常あるいはほぼ正常と判定された母親の児との間に有意差が認められたことは興味深く、周産期における妊婦の精神的因子の新生児期行動特徴への関与が示唆された。

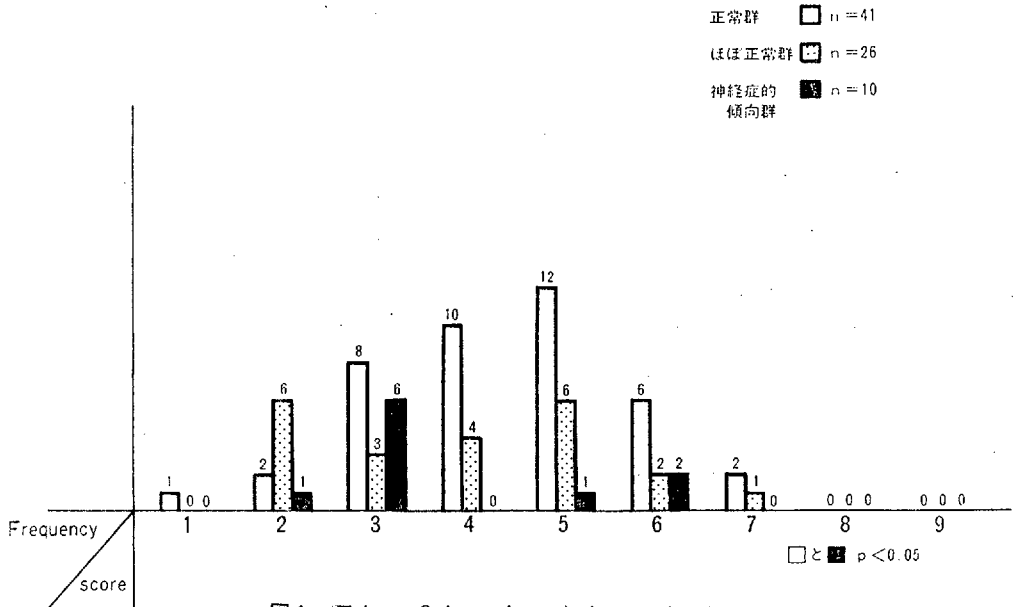


図1 尺度8 Orientation-Animate Auditory (生命的聴覚刺激に対する反応)

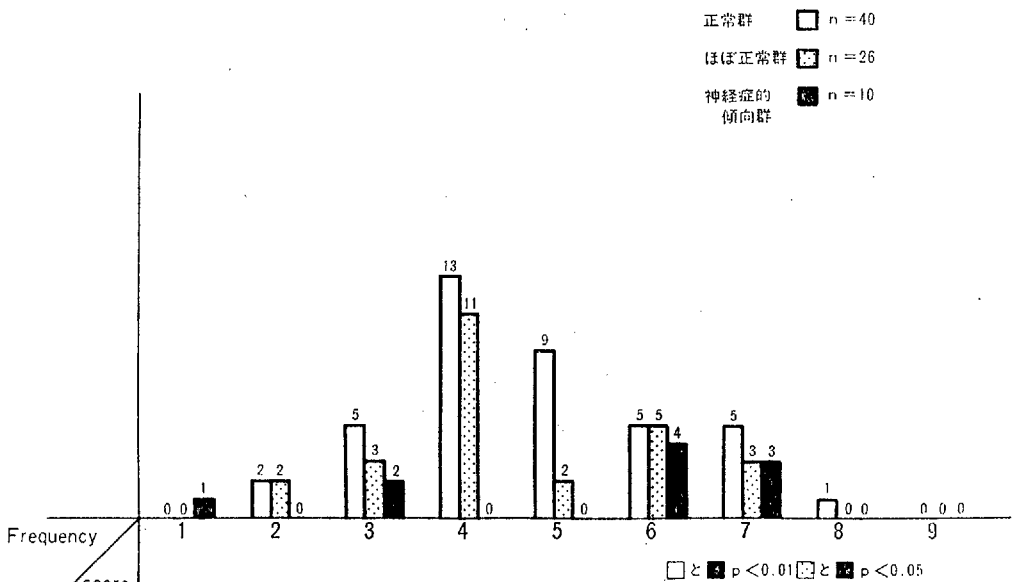


図2 尺度10 Alertness (敏活さ)

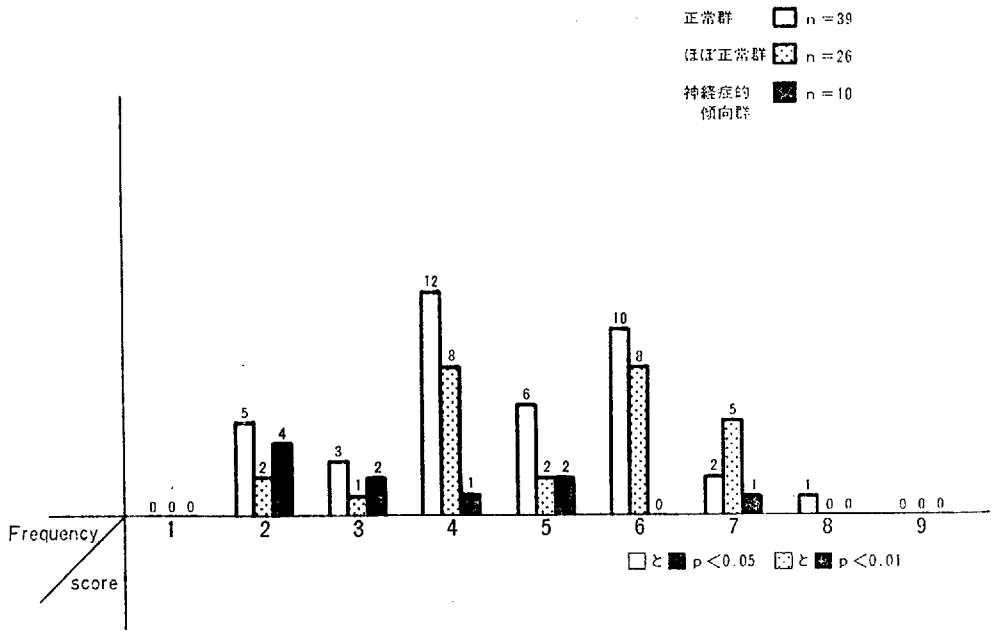


図3 尺度14 Cuddliness (抱かれやすさ)

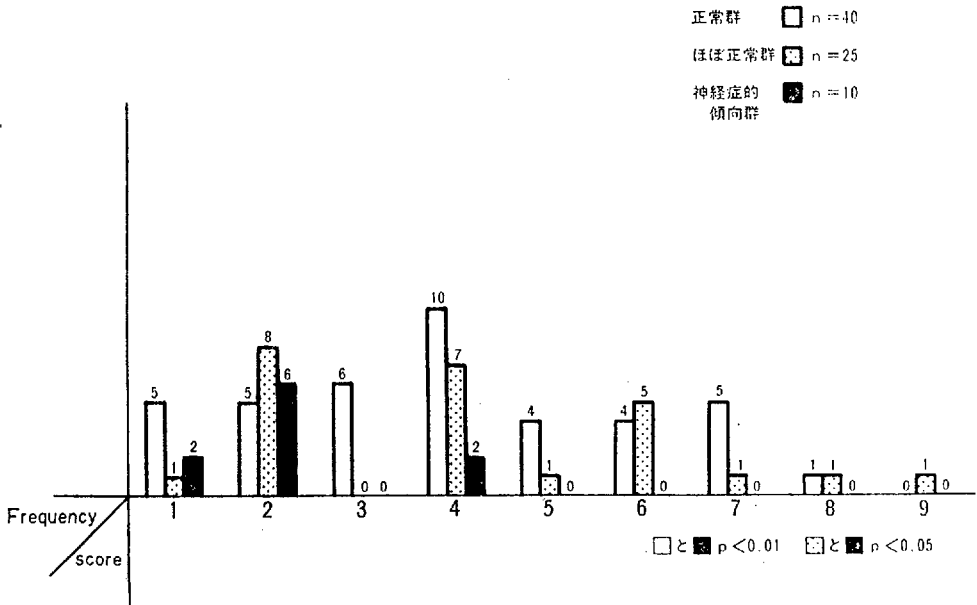
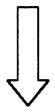


図4 尺度26 Hand to Mouth Facility (手を口へ持っていく行動)



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 研究目的

出生時の新生児にみられる行動上の個体差は著しいものがあるが、今回この個体差に関わる要因として、妊娠中の母親の精神状態(神経症的傾向)をとりあげ、児の新生児期における行動特徴との関係につき検討を試みた。